

2019年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 群馬県 】

学校名【 群馬県立新田暁高等学校 】

1 実践テーマ	I ・ III ・ IV ・ V
2 実施対象者 (学年・人数)	群馬県立新田暁高等学校 社会福祉系列3年生 障害者スポーツ研究班5名 社会福祉系列1年生16名 社会福祉系列2年生20名 社会福祉系列3年生18名 本校運動部員1年生10名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (福祉) ② 行事名 () ③ その他 ()
4 目 標 (ねらい)	パラリンピックへの興味関心を向上させるとともに、障害者スポーツを通して障害者に対する先入観や固定観念といった精神的バリアを取り除き、共生社会の実現に向けた態度を育成する。
5 取組内容	<p>(1) 系列研究（課題研究）における活動</p> <p>「Yes, I Can! 障害者スポーツの魅力発信!」という研究テーマを掲げた社会福祉系列3年生5名から構成される研究班により、障害者スポーツを通して他者の望むことやできることを理解し、心のバリアフリー化を目指して実践的な活動に取り組んだ。なお、この研究は昨年度の社会福祉系列3年生7名が始めたものであり、昨年は車椅子ソフトボールと車椅子バスケットボールを中心に取り組んだ。その先輩方が、昨年度の総合学科学習成果発表会で報告した活動内容を見て、障害者スポーツに関心を持ち、研究を引き継ぎたいと名乗りを挙げた5名による継続研究である。</p> <p>具体的な活動内容は次のとおりである。</p> <p><障害者スポーツの見学・体験、大会参加></p> <p>① みんなのバリアフリー運動会</p> <p>6/30(日)に伊勢崎市紺の郷で開催された「みんなのバリアフリー運動会」に運営ボランティアも兼ねて班員が参加した。障害の有無も年齢も関係なく、「みんなで楽しもう!」と開催される同運動会では、車椅子競争やパン食い競争、全員リレーなどが行われていた。班員も、運営ボランティア(図1・2)や上述した競技に参加(図3)し、多くの方々と交流をした。また、車椅子テニスを行っている高校生と出会い、自分たちから話しかけ、昼休みに車椅子テニスを共に行う場面(図4)もみられた。</p>



図1 運営ボランティア（受付）



図2 運営ボランティア（競技）



図3 車椅子競争への参加



図4 車椅子テニスの体験

② 車椅子バスケットボール

7/12（金）に県立ふれあいスポーツプラザで毎週金曜日18時頃から行われている車椅子バスケットボール練習会に班員が参加させていただきました。そこでは、下肢に障害を持った当事者（主に児童から高校生）やその家族が車椅子バスケットボールの練習に取り組んでおり、班員は共に練習を行ったり、普通の車椅子と車椅子バスケットボール専用車の違いや特徴について教わったりした。（図5・6）



図5 車椅子の特徴を知る



図6 車椅子バスケットボール体験

③ ボッチャ指導者講習会

8/11（日）に県立ふれあいスポーツプラザで開催されたボッチャ指導者講習会に班員が参加した。ボッチャの指導者を養成することを目的に開催された本講習会に参加したことにより、興味関心を高めるだけでなく、ボッチャの基本的なルールや知識・技術について理解を深めることができた。

（図7）



図7 ボッチャ指導者講習会

④ 高崎市ユニバーサルボッチャ大会への参加

9/22(日)にハーモニー高崎ケアセンターで開催された高崎市ユニバーサルボッチャ大会に、班員5名と運動部員6名、教員1名の計12名が参加した(図8)。本大会は3人1チームを組み、トーナメント方式で競技が進行する。本校は4組に分かれて出場し、ボッチャを楽しみながら真剣に競技に取り組んだ(図9)。競技の合間にはボッチャの専門家から技術指導をいただくこともあったおかげで(図10)、内1チームが準優勝をするといった大健闘を見せ、大いに盛り上がった。

本大会に参加した運動部員から「ボッチャ面白い」「また出したい」という声が挙がった。

なお、大会に向けて、高崎ボッチャクラブ様よりボールをお借りして学校で練習に取り組んでいた。



図8 大会に参加したメンバー



図9 専門家から教わる



図10 競技中の様子

⑤ 障害者スポーツ体験学習

県立ふれあいスポーツプラザの事業でもある障害者スポーツ体験学習に申し込み、12/27(金)に研究班員5名、運動部員の10名が参加した。STT(サウンドテーブルテニス)を体験させていただき、プラザ職員の方から教わることで、理解を深めることができた。(図11・12)



図11・12 サウンドテーブルテニス体験

以上の①～⑤のように、実際に当事者と交流をしたり、障害者スポーツ実践の場に足を運んだりすることによって、障害者スポーツの面白さを体感し、各競技の魅力を理解したようであった。

＜パラリンピック・障害者スポーツの啓蒙活動＞

① オリンピック・パラリンピックに関連する新聞記事の調査

「2020年には何がある？」と聞くと「オリンピック」と答える人が多く、パラリンピックと答える人は少ない。そこに着目した班員は、そもそもマスコミの取り上げる場面が少ないからではないかと考え、読売新聞と朝日新聞を対象に、オリンピックとパラリンピックに関する記事数を比較することにした。調査期間は2019年4月1日から12月31日までの約270日分である。

調査方法としては、系列研究の時間に図書館に行き、2社の新聞を開き、オリンピック・パラリンピックに関連する記事のそれぞれの掲載数と大きさを記録していった(図13)。その結果をExcelでまとめ、分析・比較し、グラフ等に可視化した(図14)。生徒の予想どおり、2社ともパラリンピックの記事数の方が圧倒的に少なく、オリンピックの2分の1にも満たないことが分かり、生徒は予想が当たって嬉しい反面、複雑な気持ちのようであり、この現状をどうにかしたいと思うようであった。



図13 図書館で調査する班員

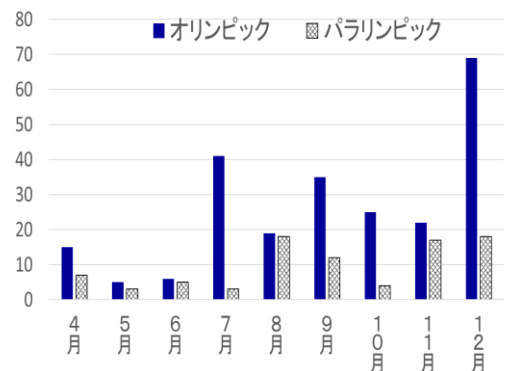


図14 記事数を比較したグラフ

② パラリンピックに関する記事の掲示

①の結果を受け、一人でも多くの方に障害者スポーツに興味関心を持って欲しいということで、①の調査中に「ぜひ皆にも読んでほしい」と思ったパラリンピックに関する新聞記事をコピーし、ホワイトボードに掲示した(図15)。全員の目に留まるところには掲示はできなかったが、足を止めて記事に目を向ける生徒も多くいた(図16)。

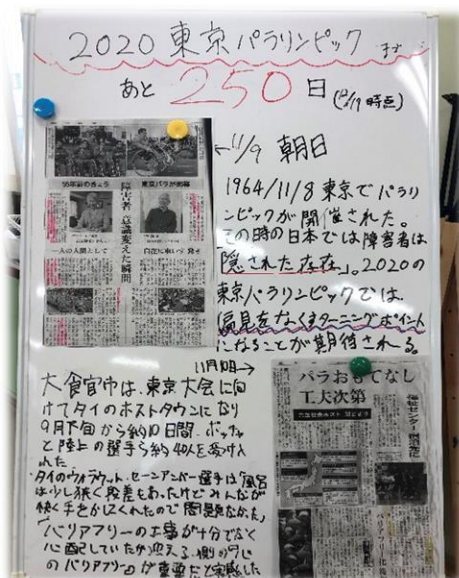


図15 記事の掲示



図16 記事に目を向ける生徒

③ 障害者スポーツの啓蒙活動（ボッチャ・ゴールボール）

前述の障害者スポーツに参加し理解を深めた上で、12月、班員たちは障害者スポーツやパラリンピックの啓蒙活動として、社会福祉系列の1～3年生にボッチャとゴールボールの2種類について、自分たちが手本を見せながら説明をしたり審判をしたりしながら教えた（図17～20）。教員はほぼ介入せず、生徒同士で行ったため、とても盛り上がり、「またやりたい」「自分たちがこの研究を引き継ぎたい」「障害者スポーツに対する見方が変わり、工夫すればみんなで楽しめる面白いスポーツだと思った」など、反響は大変良かった。



図17 ボッチャの説明をする班員

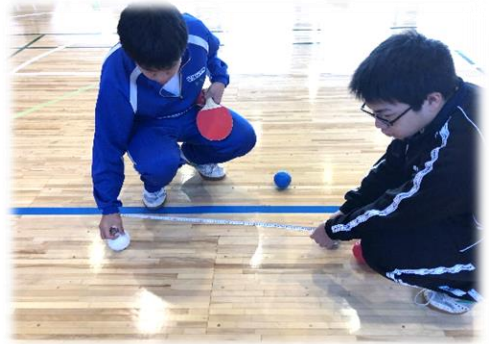


図18 審判をする班員



図19 ボッチャを行う3年生



図20 ゴールボールを行う2年生

また、高校出前授業として太田市立強戸中学校を訪問した際に、班員2名を連れていき、ゴールボールの授業を行った（図21）。班員はコートの準備から中学生への実技指導（図22）、審判を行った。授業終了後、中学生から「凄く楽しかった」や「視覚障害者が行うゴールボールを見てみたい」という声も挙がった。



図21 ゴールボールを楽しむ中学生



図22 ゴールボールを中学生に教える班員

(2) 元パラリンピアンによる講演会と実技指導

一般社団法人日本車椅子バスケットボール連盟 強化指導部運営委員である塚本京子氏から車椅子バスケットボールの実技指導と講演会をしていただいた。

実技指導は12/27(金)に県立ふれあいスポーツプラザの体育館にて行われた。研究班員5名に加え、運動部員の10名が参加した。車椅子バスケットボールのルールや競技の魅力についてお話いただき(図21)、その後基本的なチェアスキルやシュート、ドリブル等の実技指導を受け、最後にはミニゲームもさせていただいた(図22)



図21 塚本氏から車椅子バスケットボールのルール説明



図22 車椅子バスケットボールの体験(ゲーム)

講演会は1/20(月)に本校介護実習室にて福祉系列2・3年生38名を対象に行われた。「障害と共に生きる」という演題のもと、塚本氏が脊髄損傷となった経緯や入院中の生活、退院後から現在の暮らしについてお話をいただいた(図23)。また、車椅子バスケットボールの試合の映像を見せながらルールについての説明(図24)、車椅子バスケットボール専用車の特徴について実物を用いての説明をいただく他、シドニーパラリンピックのお話から銅メダルに触らせていただく場面もあった(図25)。



図23 講演をする塚本氏



図25 シドニーパラリンピックの銅メダルに触れる生徒



図24 車椅子バスケットボールの映像を用いての説明

<p>6 主な成果</p>	<p>系列研究活動の一環ということもあったので、生徒達5名が協働しながら主体的に取り組み、実践的・体験的な活動を重ねることができた。</p> <p>また、ボッチャやゴールボールなど、教員から生徒ではなく、生徒から生徒に教えるという啓蒙活動をとおして、より一層、パラリンピックや障害者スポーツについて理解を深めることができたと考えられる。</p> <p>さらに、本校で実施される系列研究中間発表会（9月）と総合学科学習成果発表会（1月）（図25）において、全校生徒や外部の来校者の前で発表したり、障害者スポーツの用具を展示（図26）したりすることにより、社会福祉系列生徒のみならず、大勢の人に広く障害者スポーツについて関心を持っていただけたのではないかと考える。</p> <div data-bbox="419 517 884 853"> </div> <div data-bbox="437 864 884 943"> <p>図25 総合学科学習成果発表会 における発表の様子</p> </div> <div data-bbox="932 517 1437 853"> </div> <div data-bbox="948 864 1437 943"> <p>図26 総合学科学習成果発表会で 会場に展示したスポーツ用具</p> </div>
<p>7 実践において工夫した点 （事業の特色）</p>	<p>本校社会福祉系列では2020年に東京パラリンピックが開催されることを踏まえ、昨年度から障害者スポーツの研究や普及活動を行っている。元々福祉を学ぶ生徒ということもあり、障害者に対する差別や偏見をどうにかしたいという考えを持った生徒が多い。そこで、“障害者”のスポーツを広めるというよりは、“みんなの”スポーツという認識で障害者スポーツと関わり、スポーツを通して隔たりをなくす（心のバリアフリー化）ことを主眼において工夫・実践してきた。便宜上、障害者スポーツという言葉をよく使うが、障害者だけのスポーツではなく、障害の有無関係なく誰もが楽しめるスポーツとして自分自身が体験する機会を持たせることで、興味関心を持ちやすかったのではないかと考える。</p> <p>障害者スポーツの用具の購入に当たっては金銭的な問題が発生するが、例えばゴールボールでは、バスケットボールをビニール袋で包んだり、アイシェードは一般的に売られている工業用安全ゴーグルに手を加えて自作したりすることで経費を抑えることができた。</p> <p>また、福祉関係のネットワークを伝って講師を紹介していただいたり、連絡調整をとることができたのは、本校ならではの特徴と思える。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>今回は、社会福祉系列生徒のみ障害者スポーツ体験の機会が与えられていたので、体育と連携して多くの生徒が体験する機会を持ったり、職員を対象に体験会を実施する時間をとればよかった。</p>
<p>9 来年度以降 の実施予定</p>	<p>福祉の授業内でも取り扱うが、昨年・今年度同様、系列研究の中で障害者スポーツをテーマに掲げたい生徒がいれば、精力的に活動をしていきたいと考える。その際は、パラリンピック種目や既存の障害者スポーツについて理解を深めるだけでなく、生徒達自身によって誰もが楽しめるスポーツを考案していきたい。</p>